

# 法哲学者はなぜ文部省著作教科書の執筆に携わったのか

— 尾高論の新地平を切り拓くために — <sup>(1)</sup>

## On Tomoo Otaka: From the Perspective of Jurisprudence and Pedagogy

小田 桐 忍

食物栄養学科非常勤講師

### 抄録：

法哲学者は教育学者の仕事に不案内である。従って、筆者の尾高朝雄をめぐる評価（以下「尾高論」という）も、これまでは法哲学者としての側面のみに注目し、検討を進めてきた観を否めない。ところが、教育学の世界に目を転ずると、そこには、文部省著作教科書『民主主義』の執筆に携わった尾高を取り上げる、もうひとつの尾高論が存在したのである。小論の目的は、そうした理論状況を受けて、一方に与して、他方を排するという方法に陥ることなく、尾高という学究について総合的立体的に考察することの意義を明確にすると同時に、これからの尾高論の進むべき途を開拓することに存する。

### Summary:

Tomoo Otaka (1899-1956) was a professor of jurisprudence. During his younger years, he spent time studying in Europe. In Vienna, he studied the pure theory of law under Hans Kelsen. In Freiburg, he studied phenomenology under Edmund Husserl. In this paper, the author reconsiders Otaka, examining him not only as a jurist but as a pedagogue as well. Otaka did many things and had an influence on a wide range of scholars and fields, for example, editing the textbook “*Democracy*”, which was published in 1948 and 1949 by the Japanese ministry of education. The author’s motto is that although the sum of the parts is not always a whole, one who cannot grasp the whole must examine the parts.

キーワード：尾高朝雄、法学、哲学、教育学、社会学、民主主義

Key words : Tomoo Otaka Jurisprudence Philosophy Pedagogy Sociology Democracy

## 1. はじめに

Leonardo da Vinci は、1つの作品を完成させるための下準備について、「ざっと書いておくべきだ」(レオナルド, 1954, 241) と述べた。だから Leonardo は、沢山のデッサンを描き、覚え書きまで認めた。その上、この「普遍万能の人」(ヴァレリー, 1977, 43) は、画家に対して「解剖学を知る必要がある」(レオナルド, 1954, 228) とまで考えた。「裸体の人々によってなされうる姿勢や身振りにおける肢体を上手に描くためには、腱や骨や筋や腕肉の解剖を知ることが」(レオナルド, 1954, 228) 大切であるからだ。こうして彼は完成した作品に永遠の生命を与えることに成功した。

わが国では、小事に拘りすぎるあまり、大事を捉えられないことの例えとして、「木を見て森を見ず」と言う。しかし筆者は、森を捉える下準備として、私たちは1本1本の木を可能な限り研究の俎上に載せなければならないと考える。その意味から、筆者は法学者の中でも比較法学の大木雅夫の方法に共鳴する者の1人である。なぜなら大木は、「揺るぎない定説」(大木, 1987, 55) となっている日本人の法観念に関する「共通のイドラ」(大木, 1987, 55) を払拭するために、Ortega y Gasset に倣って、「部分的に見たものを接合し織りなすことによって、普遍的・絶対的真理に到達することも期待できる」(大木, 1987, 55) と信じているからだ。筆者は、画家にとっての解剖学的知識の必要性を論じる Leonardo と法学者にとっての部分的視点に徹することの意味を主張する大木との間に、方法として通底する何か<sup>(2)</sup>を感じている。そして両者に後押しされて、筆者は小論の執筆と投稿を決意した。

導入がいささか饒舌になってしまったが、小論の目的は、尾高朝雄(1899-1956年)の業績の“再”評価<sup>(3)</sup>に向けての基盤を整備し、尾高論の新地平を切り拓くことである。それは尾高というわが国の法学界の共有財産について論述することであり、もはや十分に評価され尽くした観のある尾高論について、今一度、議論し直すことである。こうした地道な作業を抜きにして小論の目的を達成することはできない。そこで以下では、これまでの尾高論、もうひとつの尾高論、これからの尾高論の順に論述を進めることにしよう。なお小論では、都合上、著者自身が尾高について論じることを目的とした著書論文の総称として「尾高論」を用い、間接的に尾高に言及する程度のものは、これを含まないものとすることにした。予めお断りしておきたい。

## 2. これまでの尾高論

尾高論は、尾高の死後、かつての同僚(親族を含む)と門下生によって開始された。従ってここでは、同僚による尾高論と門下生による尾高論に分け、双方の立場が概観されることになる。

### 2-1. 同僚による尾高論

清宮四郎は、京城大学以来の尾高の同僚として、尾高の追悼文を綴った。その中で、清宮は尾高の人柄にまで言及しながら、学究としての尾高を論じる。清宮は、「鋭い分析力と豊かな総合力との見事な調和」(清宮, 1956, 12) から生じた「精緻で奥深いと同時に幅の広い点」(清宮, 1956, 12) に尾高の学問の特質を認める。具体的には、尾高が『国家構造論』(1936年)を公にしてから『実定法秩序論』(1942年)を著すまでの間に、清宮は尾高における分析から総合への発展の形跡を

看取する。次いで、尾高が『数の政治と理の政治』(1948年)と『自由論』(1952年)の中で展開した「戦後の日本の新しい政治の動き」(清宮, 1956, 12)としての「民主政治」の説明について、清宮は「一般国民」あるいは「一般の人」にも一読するよう薦める。その他、清宮は当時多忙を極めた尾高の生活についても言及する。出版社の求めに応じて執筆された清宮の追悼文は、1956年5月26日に書き終わっている。限られた紙数ではあるが、かつての同僚として、同年5月15日に急逝した尾高について語った清宮の尾高論は、格調の高い秀作である。

京都大学での修業時代の同僚、臼井二尚<sup>(4)</sup>は、次のように回想する。臼井は、「1年間の休学で健康を取り戻し得て京大に復学したが、それから1年して米田庄太郎先生が退官され、西田幾多郎先生が社会学の演習を受け持たれた。この時西田先生の用いられたテキストはマックス・ウェーバーの *Wissenschaftslehre* であった。(中略) 演習でウェーバーを西田先生の前で訳すのは、今は亡き尾高朝雄君と私の2人だけであったが、聴講者には社会学の専攻学生以外の人々が多く、経済学部助教授なども幾名も見えていた。そういう大勢の人々の中で1週交代にウェーバーを訳すのは楽な仕事ではなかったが、良き師良き友の間で学び得た身の幸を、今もしみじみ感ぜしめられる」(臼井, 1964, 560)と述べる。さらに、臼井は、現象学を研究する尾高の様子も私たちに伝えてくれる。それによれば、やがて臼井自身が「ドイツに留学することになり、時を同じくしてフライブルクで学ぶようになった三宅剛一・尾高朝雄・大小島真二の諸氏と共に、月に1・2回ずつフッサール家を訪れて、直接この偉大な学者の教えを受ける事を続けた」(臼井, 1964, 563)ようである。ここには、社会学や現象学といった、後の尾高の思想形成に大きな役割を果たすことになる人物や書物と懸命に向き合おうとする尾高がいる。

尾高の人柄を表す次の話も興味深いものがある。臼井が「エディト・シュタインとゲルダ・ワルターとの共同社会論」(臼井, 1964, 562)に関心を持っていたとき、後者の別刷は安価で入手できたが、前者には別刷がなかったため、臼井は入手できずにいた。「しかし尾高君がたまたまシュタインの論文の載っている年報を2冊買わねばならぬような事情になったから」と言って、「そのうちの1冊」が臼井に付与されたようである。「数多い尾高君の私への芳情の1つの例」(臼井, 1964, 562)として、臼井は挙げている。尾高は、こうした同僚への配慮を躊躇することなく、率先して実行できる人物であった。

## 2-2. 門下生による尾高論

ここに言う「門下生」とは、尾高の指導の下で「法哲学を学んでいた、いわば直系の門下生」(小林, 1990, 3)を指す。彼らの周辺は、確かに欠乏の時代であったにもかかわらず、「解放感と民主主義の未来への希望にみちていたせいか、学園の明るい活気に溢れていた」(小林, 1990, 2)ようである。

門下生による尾高論の中で最も優れているのは、尾高が急逝して約1年後に井上茂と小林直樹によって実現した座談会(井上・小林, 1957a; 1957b)であろう。この座談会の中では、尾高法哲学の特徴が期間を区切って概観されることになる。第1に、留学前の尾高は社会学的考察の重要性を探究した。「法律社会学」とは、尾高によれば、「法律現象」を「単に1の事実的存在」とし

て説明するのみならず、社会をして社会たらしめる「基礎的因素」たる多数人の「相互関係」、つまり厳密にその意味を定められた「社会関係」の諸形態と結びつけて説明する科学として展開されるべきである(尾高, 1926, 3)。かかる尾高の学問的関心は、京都大学時代から追求され続けた。従って、尾高は主として「当時のドイツの哲学や社会学の成果の批判的摂取」(井上・小林, 1957a, 2)を行った。井上は、この時期の尾高の学問的特徴を、一方では Georg Simmel が強調した「ライネゾチオロジー」Reine Soziologie を通して、社会学の対象領域を限定している。そして他方では Ferdinand Tönnies に倣って、社会関係の基本的分類の理論を提示している。第2に、留学中の尾高は、一方では Hans Kelsen の純粋法学<sup>(5)</sup> からその積極的成果を汲み取り、他方では Edmund Husserl の現象学<sup>(6)</sup> の影響を受けたと考えられる(井上・小林, 1957a, 2)。特に後者について、小林は体系の直接的な方法論としてよりも、「実在から出て実在に」帰ろうとする基調に従って「実在論と観念論との総合」を目指すものとして捉えようとしている。第3に、終戦後の尾高は、「従来のドイツ観念論的法哲学及び従来のドイツ社会学の思想の枠」を超えて、特に唯物史観とイギリス経験論の立場を掘り下げることになる(井上・小林, 1957a, 5)。尾高は前者を厳しく批判し、後者の必要性を強く主張したのであった。以上のような座談会を通して、小林は尾高の「法哲学の総論的な部分」を看取り、井上は尾高における「構造的統一性」の戦前からの連続性を確認したのであった(井上・小林, 1957b, 6)。そして筆者は、井上と小林の尾高論から、第1に尾高が統一と総合を重視していたこと、第2に対象を分析し真実に接近するための唯一の方法があり得ないこと、以上を謙虚に受け止めることにしよう。

その後、松尾敬一は門下生の1人として1965年に尾高論3部作を発表した(松尾, 1965a; 1965b; 1965c)。尾高の著書論文から直接引用した松尾の尾高論は、尾高の全体像を把握するために有益であり、一読に値する。

続いて、碧海純一も尾高論3部作<sup>(7)</sup>を公表した。第1論文(碧海, 1963)では、尾高を追悼するために編まれた同僚と門下生による論文集への寄稿であることを受けて、碧海自身が、尾高の民主主義理論の根幹を成す価値相対主義の特徴について、Bertrand Russell と Karl Raimund Popper との共通点及び相違点を見出そうとした。第2論文(碧海, 1979)と第3論文(碧海, 1980)では、戦後の尾高思想の総括が試みられ、尾高における経験主義の位置が明確にされた。どれも論理実証主義の観点から法哲学的営為を展開した碧海ならではの議論である。

### 3. もうひとつの尾高論

ところで、学問の歴史は、当該領域の専門化が進行することにより、細分化を惹起してきた。その結果、たとえ隣接領域における出来事とは言え、専門性が異なれば、隣接領域に関する理解を阻止することもしばしば生じ得た。小論に即して言えば、法哲学者は教育学を知らず、教育学者は法哲学を知らなかった。もうひとつの尾高論は、そうした状況の中で育まれることになった。

#### 3-1. もうひとつの尾高論への胎動

これまでの尾高論が出来する中、尾高の最初の門下生だった井上茂<sup>(8)</sup>は、なかなか尾高論の執

筆に着手しなかった。そんな井上の尾高論が登場したのが 1980 年<sup>(9)</sup>である(井上, 1980)。山のように書き溜められた原稿の中から、大事なところだけを搾り出したかのような観のある、井上の尾高論の著述の中に興味深い 1 節がある。井上によれば、「ひろく一般にも読まれた斬新な文部省教科書『民主主義』上下 2 冊は、名は明示されていないが、重要な最も尾高らしい仕事であった」(井上, 1980, 140) のである。その上で井上は、当時の文部事務官が尾高の「仕事ぶり」、「学殖」、「人柄」に讃辞を惜しまなかったと述べている。これまでの尾高論の中でこの点に言及する論者は存在しなかった。井上の尾高論に触発されたかのように思われる矢崎光圀の尾高論では、かかる『民主主義』について、「尾高朝雄略年表」(矢崎, 1980, 84-86) の中で「昭和 23 年の高校用国定教科書『民主主義』上下は実質上、尾高の編集になるものであり、とくに第 1 章「民主主義の本質」は尾高自身が書いている」(矢崎, 1980, 86) と記された。尾高が第 1 章だけを執筆したのではないことが明らかであるにしても(片上, 1993, 882-904)、とにかく井上と矢崎の尾高論には、新しい尾高論に向けての胎動が見られた。

### 3-2. もうひとつの尾高論への展開

確かに文部省著作教科書『民主主義』(以下「教科書」という)は、文部大臣の森戸辰男が計画し、尾高が編集主任となって制作された。1948 年 10 月 30 日に教科書上巻が、翌 1949 年 8 月 26 日に教科書下巻が文部省によって発行されたのである(文部省, 1948 ; 1949)。教科書の成立経緯及び内容批判の詳細について、私たちは船山謙次と片上宗二がそれぞれ成し遂げた浩瀚なる研究書を参照しなければならない(船山, 1963 ; 片上, 1993)。ところが、船山と片上は、法哲学者としての尾高の業績について全く触れることなく、ただ尾高の教育学、特に社会科教育に関する仕事にのみ着目し、著作の中で取り上げている。反対に井上は、「尾高の戦後は、研究者・教育者としての大学の内外での思考と行動とにおいて、民主主義とは何かを究明し、それを体現していくことにつきた」(井上, 1980, 140) と論じた上で、その具体例として、教科書の執筆及び編集を挙げたが、井上自身は実際に教科書を検討し吟味することはなかった。その意味で、もうひとつの尾高論は、主に船山や片上のような教育学者によって展開されていたと言えよう。

これまでの尾高論や井上の尾高論によって既に明らかにされているように、尾高の学究としての終戦後の仕事は民主主義の究明であった。そうした尾高の仕事内容が占領軍総司令部(以下「司令部」という)の目に留まり、教科書の編集主任を任されることになったのではないかと推察されよう。当初、司令部は、教科書の編集主任を誰に任せるのが適切なのか決めかねており、その責任者 Howard Bell<sup>(10)</sup> は、1947 年 8 月、長い間、教科書の編集を「内容的にも文章的にも任せられる有能な人物を捜していた。それが、ようやく東京大学法哲学の教授である尾高の発見となって実を結んだようである。尾高を選んだことは、どの点から見ても、文句のない人選である」(片上, 1993, 887) と述べている。翌 1948 年 2 月になると、Bell は、尾高が「この仕事についてフリーハンドに動けるようになることが望ましい」(片上, 1993, 888) とも言っている。こうして尾高は法哲学の学究としてのみならず、教科書の編集主任として民主主義の思想とその教育にまで携わることになったのである。

教科書も、そして尾高も、日本国憲法がそうであったように、批判の矢面に立たされることになる。尾高は、「日本国憲法の基本原理たる西ヨーロッパ的の民主主義を、あらゆる角度からできるだけ丁寧に解説した」(尾高, 1949, 31) にすぎなかったが、それを「国定『民主主義』」(船山, 1963, 65) と勘違いされたり、「新しい『国体の本義』」(船山, 1963, 68) と罵られたりした。そこで尾高は、2つの方面から反論を試みた。第1に、教科書の制作過程をとにかく穿鑿しようとすることに對して、確かに「司令部の意向があり、司令部の協力があり、司令部の全面的承認があつてできたものであることは事実である」(尾高, 1949, 35) としながらも、尾高は、教科書の内容が「日本人によって書かれ、日本人がこれが正しい民主主義であるとして理解したものを、日本の青少年に理解してもらうためにできたものであること」(尾高, 1949, 35) を尊重すべきだとしている。第2に、教科書の内容を批判することに對して、尾高は、「これを実際に学校で使用される先生方の感想や批判を仰いで、だんだんとよいものに仕上げて行きたい」(尾高, 1949, 30) と感慨を語っている。また、教科書の「内容を客観的に批判」(尾高, 1949, 35) し、「関心をもつ多くの人々の意見を基礎として、これをもっともっとよい民主主義の読本に育てて行きたい」(尾高, 1949, 35) と抱負を語る尾高の言葉から、真摯に教育現場と向き合い、国民に民主主義を広めるための努力を惜しまなかった、尾高の真骨頂が窺われる。

門下生の間では、尾高が教科書の編集主任として、その制作過程に携わったことは周知の事実だったに相違ない。ただ管見では、松尾や碧海の論述の中に、そのことに言及する部分は存在しない。教科書の冊子本体に尾高の名前が明記されていなかったためであろうか。それとも、尾高という学究を研究の俎上に載せるとき、教科書の編集主任としての仕事を尾高の研究活動から除外したためであろうか。門下生により執筆されたこれまでの尾高論を読む限り、筆者には何かが不足しているように思われてならなかった。他方、もうひとつの尾高論を展開してきた教育学者は、教科書の制作過程の解明に委曲を尽くすあまり、尾高の全体像における教科書の位置づけにまで手が回らなかったようである。この点に、これからの尾高論の展開の方向性が見え隠れしている。

#### 4. これからの尾高論

ここまでの論述からも明らかなように、これからの尾高論は学問の境界を越えて受け継がれるべきである。なぜなら、尾高は法学者であり、教育学者であり、社会学者<sup>(11)</sup> でもあったからである。尾高は、法律にも政治にも社会にも通じた複合領域の研究者以外の何者でもなかった。そのために尾高は教科書の編集に相応しいと司令部から判断され、依頼が舞い込むことになったのであろう。そこで小論は、現時点で筆者が思いつく限り、教科書の編集を受諾した尾高の目論見を検討してみたい。

##### 4-1. 国家を再建し文化を復興するために

終戦直後、尾高は「いまこそわれわれ学者が力をあわせて国家の再建と文化の復興のためにつくすべき」(尾高邦雄, 1956, 292) だという意味のことを語った。尾高は、ちょうど終戦後のこの

時期に居合わせることの学究としての使命のようなものを感じたに違いない。それを直感した尾高は、あれほど多忙な公務（例えば、著述、講義、大学行政、学会設立、学術会議、ユネスコ国内委員会設置など）の中でも、教科書の編集主任を承諾したのであろう。そのため「御用学者」とまで糾弾されたが、尾高は本当に学問的節操を守らず、権力への迎合と追隨に阿る人物だったのであろうか。学究にはその者の生きた時代における使命があり、そうした使命に応えなければならない立場にある者もいたのだと筆者は思っている。尾高は、そうした社会的要請に応えなければならなかった、限られた学究の1人なのである。

#### 4-2. 尾高自身の終戦後の課題を追究するために

尾高は、終戦後、「法哲学という学問を、できるだけやさしく表現して、ひろく社会問題に関心をもっている人々の精神的共同財とすることに、これからの主たる力を注ぎたい」（尾高, 1951b, 19）と述べている。また、尾高はこうも記す。従来の哲学のあり方を批判し、これまで「むずかしいこと、わからないこと」が哲学の「特権」、「誇り」、「魅力」であるとされてきた。しかし、「わからない哲学がわからないために尊ばれていたとしても、それが社会の進歩にとって何の意味をもつ」（尾高, 1951b, 19）のであろうか。これからの哲学は、「人間の人間に対する信頼」の前にのみ開かれ、「破局と混乱とを避けて正しい社会の建設にむかう道」（尾高, 1951b, 20）を進まなければならない。尾高は、そういう哲学の「ポピュラリゼーション」（尾高, 1951b, 20）の必要性を説いている。筆者は、教科書の編集主任を尾高が承諾したことの背景には、彼の考えた「ポピュラリゼーション」の1つの実践の遂行があるように思われる。

#### 4-3. 構造論から機能論へ自説を転換するために

そもそも尾高の『国家構造論』は、「国家現象の全貌を究明し、實在国家の生命を把握」（尾高, 1936, 1）しようとした尾高の願望から生れた。それは国家制度一般を研究目標とする「一般国家学」の中に包摂され、「国家機能論」（尾高, 1936, 534）の展開を予定するものである。かかる機能論について、尾高は「国家の法内在的機能と法超越的機能とを総合的に考察することによって、国家構造論を補足布衍し、以て實在科学としての一般国家学の体系を完成すると同時に、国家変遷の非合理的過程の真髓を把握しようとする」（尾高, 1936, 534）試みに他ならないと述べている。しかし、生前の尾高が自らの機能論<sup>(12)</sup>を公にすることはなかった。ただ機能論が「個別国家の特殊性」（尾高, 1936, 2）の記述であるとすれば、日本国憲法下における政治体制としての民主主義の検討及び教科書の編集が尾高のライフワークとも通底していたことは明らかなのである。

### 5. 小論の補遺として

これからの尾高論は、こうした論点の1つ1つを解明しながら、展開されなければなるまい。1人の学究の生涯を辿り、彼の業績を評価し直す、尾高論に終わりはない。筆者のように、自らの思考と言葉で「哲学する」philosophieren ことのできない学徒は、尾高に倣って学問を志す。だが、尾高は急峻な高峰である。私たちの登頂をそう易々とは許さない。だからこそ尾高論もイン

フレーション状態を惹起する。小論の脱稿を直前にして、たまたま2つの尾高論の存在を知ることになった。一方(長谷川, 2006)は、オーソドックスな研究手法に基づく成果であるが、他方(石川, 2006)は、新資料の読解を通して新しい尾高像を提示しようとする意欲作である。もはや小論には、それらを吟味し検討する暇がない。だが、尾高論を展開する私たちが常に肝に銘じておかねばならないこともある。「うわずみ」をすくわず、本質を見極めることが、それである。

## 論註

(1) 筆者の乏しい表現力や文章力から、ややもすれば、研究者の間に誤解をもたらしかねない。そこで、あえて最初に諒解を乞うておきたい。今日、「教科書」とは、「文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教科用図書」(学校教育法第34条第1項)であり、「小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及びこれらに準ずる学校において、教育課程の構成に応じ組織排列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書」(教科書の発行に関する臨時措置法第2条第1項)である。そして教科書の執筆は、各教科教育に携わる人びとのアルバイト的な作業になってしまっている。より厳密に言えば、それは「執筆」ではなく、「監修」と言ったほうが相応しい。かかる社会通念からであろうか、筆者が学会発表を行った折、一部の出席者から、「文部科学省の業績リストにさえ、そのようなものを掲載しない」と厳しい口調で言われたことがある。限られた時間内での発表であるだけに、反論の機会も与えられず、同じ研究者として苦汁を嘗めたことがあった。わざわざ学会側が討論者を依頼し、当該者に発表者の発表内容を講評させるからには、講評内容に対する発表者の見方を述べさせるのでなければ、あまりにも議論が一方的過ぎ、「学会」という学問的に開かれた団体を名乗ってはいけなく思われる。他方、司会者たる者は、かかる発表者と討論者との間で闘わされる議論の交通整理に徹すべきであり、決して私情を差し挟んではいけない。

さて、尾高が執筆に携わった文部省著作教科書『民主主義』は、そうした今日の教科書と同じ意味で捉えられるべきではない。それは、尾高という1人の学究が全身全霊を捧げて挑戦した、極めて学術性の高い著作物に他ならなかったからである。例えて言えば、フランスの中世史学の泰斗 Jacques Le Goff の執筆した子ども向けの歴史書に匹敵する。彼自身が自伝の中で回想する件、つまり「子供たちのために『子供に語るヨーロッパ』を書いたが、その中でヨーロッパ人の過去の過ちや罪を隠さず、またヨーロッパのみならず世界にとっても、すばらしい成功や価値も明らかにした」(ル・ゴフ, 2000, 262)ことは、尾高においても真実である。なお、筆者は、常々「子ども」と表記するが、ここでは訳文中の「子供」を尊重し使用することにした。

(2) 同じ法学者でも、法哲学者の井上茂は、H. L. A. Hart の現代分析法理学をわが国の法学界に紹介するに当たり、1・2の論文だけを読んで批判することは問題にならない。個々の論文には、当該論文の基礎があり、背景がある。それらとの脈絡において、当該論文は取り上げられなければならない。支持するにせよ、否認するにせよ、「うわずみ」(井上, 1969, 72)をすくって、それをあげつらうことは学問の世界では許されないと述べている。こうした井上の学究としての姿勢もまた、筆者には、学問的考察における部分的な1つ1つの考察の積み重ねの大切さを説いているように思われてならない。

(3) わが国の法哲学の「水準を世界的なものにまで高めた」(木村, 1942, 72)尾高が生前から好意的にも批判的にも評価の矢面に立たされていたことは否めない。この段階での尾高に対する評価は、まだ“再”評価ではない。従ってここでは、そうした中から、尾高と同時代の学究による評価の一部を示すに止めよう(黒田, 1932; 宮澤, 1936; 南原, 1937; 木村, 1942; 田中, 1947; 加藤, 1948; 鶴飼, 1950)。



(4) 白井に対する筆者の関心は、内海洋一博士との生前の交流の賜物であることをここに認めておかなければならない。ある学会での発表に先立ち、内海博士から、次のような貴重な教示を受け賜うことができ、筆者にとって望外の喜びであった。「私は法学には全くの素人ですが、尾高朝雄教授の師であった米田庄太郎先生の第一の門下生であった高田保馬先生の指導を受けて勉強してきました。そんな関係で、高田先生の弟弟子というべき白井二尚先生にも昵懇にして戴きました。白井先生から尾高教授のことをちょっと聞いたこともありましたが」(2003年9月1日付の私信より)と。因みに、内海博士の手際よい司会のお陰で、筆者の学会発表は無事終了した。

(5) 尾高は、ウィーンでの研究生活を振り返り、「ケルゼン宅から帰る深夜の路上でひとりマロニエの実を拾いながら先程までの議論のあとをたどり、時には涙したこともある」(井上, 1980, 136)と語っている。そんな尾高について、Kelsen は、世界中から集まった数多くの研究者の中で、「日本人が一番優秀だとして、尾高朝雄教授の名を挙げていた」(田中, 1950, 1)と田中耕太郎が証言している。

(6) 現象学に対する尾高の貢献についても筆者は触れておかなければならない。尾高と共に Husserl の影響下にあり(尾高, 1938, 29-31)、現象学的社会学の地平を切り拓いた Alfred Schütz は、彼の出世作『*Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*』(1932年)の刊行に際して、「京城大学(日本)の尾高朝雄教授」(Schütz, 1932, IV)に対する格別の謝意を表している。その理由は、第1に、尾高が Schütz の思想に深い関心と理解を示したからであり、第2に、Schütz の同書の出版に際して積極的な援助を行ったからである。このことは同書の日本語訳に Schütz 夫人が寄せたメッセージからも窺い知ることができる。同夫人の言葉によれば、「夫はドイツ語でしばしば尾高氏を援助し、尾高氏は夫の書物の刊行の件で援助して下さいました」(シュッツ, 1982, 4)とある。だからこそ、両者の著書が同じ時期に、ウィーンの Verlag von Julius Springer から刊行されることになったのであろう。この方面での尾高論、特に Schütz との思想的関連性については、主として社会学の領域で推し進められている(Wagner, 1983, 36-37, 52, 332; Sato, 1999, 39-55; Lang, 2009, 3-11)。

また、1935年7月10日付の Edmund Husserl の書簡の中に、「フェリックス・カウフマンがイギリスで効果的な援助をしてくれたおかげでドクトル・フィンクは1年間の保証を得ました(それに加えて京城の尾高教授の寄付金もあるのです)」(フッサール, 1982, 133)とある。以上から推察すれば、尾高は現象学運動を理論面からのみならず、資金面からも支援していたことになるのかもしれない。

(7) 碧海には、管見によれば、上記3部作の他に、次のような2つの作品もある。一方(碧海, 1957)は、わが師を突然亡くした1人の教え子としての悲しみが綴られている。他方(碧海, 1958)は、尾高の初期の論文を中心に門下生によって編集・校正された『法律の社会的構造』(1956年)の書評である。どちらも興味深い作品である。ただ紙幅の都合上、小論では割愛せざるを得なかった。

(8) 私事にわたるが、井上には、恩師の追悼に関する独特の考え方がある。それを筆者が知ったのは、Hart が1992年12月に亡くなり、ある出版社が翌1993年12月に当該出版社の雑誌(1994年3月発行)の企画として Hart の追悼を計画したときである。井上にも編集部から追悼文の依頼があった。しかし、井上は筆者に「ハート先生の追悼は私が追悼しようと思いついたときに行いたい」と述べた。筆者は、恩師の名声が高ければ高い程、恩師が亡くなったときから追悼文を書きたがる門下生ばかりかと思っていただけに、井上の言葉には驚かされた。

(9) なお、厳密に言えば、井上が尾高を論じたのは、このときが最初ではない。井上は、1946年から1950年にかけて、尾高と憲法学者の宮澤俊義との間で交わされた“主権”論争の法哲学的考察を試みている(井上, 1959)。尾高の門下生でありながらも、恩師の言質を冷静に分析する井上の姿勢の中に、私たちは、尾高法哲学を離れて、井上法哲学を創り出す日が近いことを予感する。その後、井上はオックスフォードに

向い、そこで Hart に出会うことになる。法学説史一般を研究することの意義を再検討しようとする者にとって、井上のこの作品（井上, 1959）は必読するに値する。

(10) 尾高は、Bell について、「ベル博士は政治教育の専門家で、その方面のすぐれた著書もある」（尾高, 1949, 34）と書き記している。また、尾高が教科書の編集に「これほど深入りしてしまった」のも、「ベルさんとの友情のしからしむるところ」（尾高, 1949, 34）であったようである。尾高は、教科書がどのようにして「でき上がったものであること」（尾高, 1949, 35）を読者に知ってもらうため、Bell との「人間的なつながり」をあえて披露したようである。

(11) 尾高の研究の原点には確かに社会学があった（尾高, 1926; 1927; 1950; 1951a）。

(12) 尾高には、戦後、国家について論じる機会が何度かあったが（尾高, 1948; 1954）、機能論の展開にまでは至らなかった。

## 文献

碧海純一, 1957 「尾高朝雄教授のおもいで」 尾高朝雄他編『法哲学講座』第8巻, 有斐閣: 講座の栞.

碧海純一, 1958 「尾高朝雄著『法律の社会的構造』」『国家学会雑誌』72 (7): 75-89.

碧海純一, 1963 「経験主義・民主主義・自由主義」 尾高朝雄教授追悼論文編集委員会編『自由の法理』有斐閣: 529-563.

碧海純一, 1979 「経験主義の法思想」 野田良之他編『近代日本思想史大系』第7巻, 有斐閣: 387-427.

碧海純一, 1980 「尾高朝雄教授の晩年の思想の一面についての覚えがき」『法哲学年報』1979: 214-222.

石川健治, 2006 「コスモス—京城学派公法学の光芒—」 酒井哲哉編『「帝国」日本の学知』第1巻, 岩波書店: 171-230.

井上茂, 1959 「戦後の“主権”論争」『法学セミナー』5: 64-70.

井上茂, 1969 「現代分析法理学」同『法哲学研究』第1巻, 有斐閣, 1971: 48-73.

井上茂, 1980 「尾高朝雄—法の窮極を求めて—」『法学セミナー』3: 135-140.

井上茂・小林直樹, 1957a 「座談会(1)尾高法哲学を語る」『書齋の窓』46: 1-7.

井上茂・小林直樹, 1957b 「座談会(2)尾高法哲学を語る」『書齋の窓』47: 1-7.

鵜飼信成, 1950 「尾高朝雄著『法と事実』」『法哲学四季報』5: 126-132.

ヴァレリー, 1977 『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法』山田九朗訳, 岩波書店.

白井二尚, 1964 『社会学論集』創文社.

大木雅夫, 1987 「極東の法観念に関する誤解」『法哲学年報』1986: 55-67.

尾高邦雄, 1956 「亡き兄朝雄の思い出」『文藝春秋』7: 286-293.

尾高朝雄, 1926 「法律社会学の概念とその問題」同『法律の社会的構造』勁草書房, 1957: 1-83.

尾高朝雄, 1927 「社会的事象の形式と素材」同『法律の社会的構造』勁草書房, 1957: 85-130.

尾高朝雄, 1936 『国家構造論』岩波書店.

尾高朝雄, 1938 「フッサール先生の永逝」『法律時報』10 (8): 29-31.

尾高朝雄, 1948 「国家の理論」社会主義教育協会編『社会主義講座』第6巻, 三元社: 7-53.

尾高朝雄, 1949 「教科書『民主主義』について」『教育現実』12: 30-35.

尾高朝雄, 1950 「法社会学の対象について」『社会学評論』3: 16-22.

尾高朝雄, 1951a 「憲法の社会学」『法社会学』1: 1-15.

- 尾高朝雄, 1951b 「法哲学の現代的課題—法哲学界の回顧と展望—」『法律時報』23 (12) : 19-20.
- 尾高朝雄, 1954 「国家」田辺寿利編『社会学大系』第3巻, 石泉社 : 9-52.
- 片上宗二, 1993 『日本社会科成立史研究』風間書房.
- 加藤新平, 1948 「尾高朝雄著『法の窮極に在るもの』」『季刊法律学』3 : 142-154.
- 木村亀二, 1942 「尾高朝雄著『実定法秩序論』」『法律時報』14 (10) : 72-76.
- 清宮四郎, 1956 「尾高朝雄教授の急逝を悼む」『ジュリスト』108 : 11-12.
- 黒田覚, 1932 「尾高朝雄『社会団体理論の基礎づけ』—ウィン学派の社会学、その三—」『法学論叢』28 (4) : 650-656.
- 小林直樹, 1990 「尾高朝雄先生と若き学徒たち」『ジュリスト』960 : 2-3.
- シュッツ, 1982 『社会的世界の意味構成—ヴェーバー社会学の現象学的分析—』佐藤嘉一訳, 木鐸社.
- 田中耕太郎, 1947 「尾高朝雄教授『法の窮極に在るもの』」『法学協会雑誌』65 (1) : 49-56.
- 田中耕太郎, 1950 「アメリカ通信(9)」『朝日新聞』11月17日 : 朝刊1面.
- 南原繁, 1937 「現象学的国家論の問題」『国家学会雑誌』51 (4) : 82-96.
- 長谷川西涯, 2000 「尾高朝雄と「政治の矩」—法の言語哲学前夜—」『成城法学』62 : 125-162.
- フッサール, 1982 『フッサール書簡集 1915-1938』桑野耕三他訳, せりか書房.
- 船山謙次, 1963 『社会科論史』東洋館出版社.
- 松尾敬一, 1965a 「戦中の尾高法哲学」『神戸法学雑誌』14(4) : 696-739.
- 松尾敬一, 1965b 「尾高法哲学の形成」『神戸法学雑誌』15(1) : 1-47.
- 松尾敬一, 1965c 「戦後の尾高法哲学」『神戸法学雑誌』15(2) : 183-236.
- 宮澤俊義, 1936 「尾高教授の『法哲学』」『法律時報』8 (3) : 27-28.
- 文部省, 1948 『民主主義』上巻, 教育図書.
- 文部省, 1949 『民主主義』下巻, 教育図書.
- 矢崎光圀, 1980 「尾高朝雄の法哲学」『法哲学年報』1979 : 61-86.
- ル・ゴフ, 2000 『ル・ゴフ自伝—歴史家の生活—』鎌田博夫訳, 法政大学出版局.
- レオナルド, 1954 『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記 (上)』杉浦明平訳, 岩波書店.
- Lang, Evelyn Schutz. 2009. Alfred Schutz and His Everyday Life: Commemorative Address. Hisashi Nasu, Lester Embree, George Psathas, Ilja Srubar (Eds.). *Alfred Schutz and his intellectual partners*. UVK Verlagsgesellschaft mbH. 3-11.
- Sato, Yoshikazu. 1999. Tomoo Otaka and Alfred Schutz in the 1930's -Their Social Theory and Its Socio-Cultural Background-. 『立命館産業社会論集』35 (1) : 39-55.
- Schütz, Alfred. 1932. *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt. Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*. Verlag von Julius Springer.
- Wagner, Helmut R. 1983. *Alfred Schutz. An Intellectual Biography*. The University of Chicago Press.